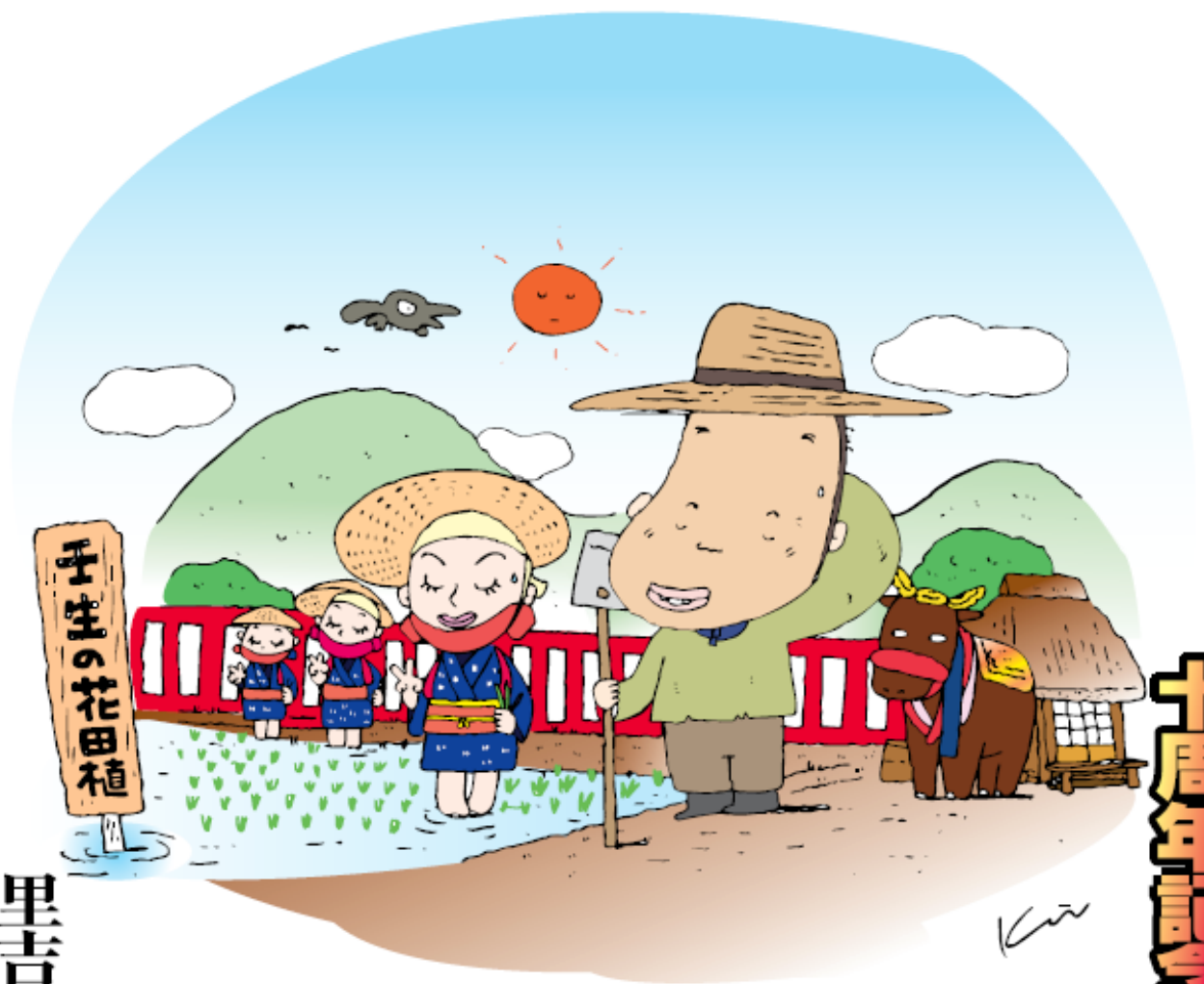


おじさんの青春日記

10th 巻

十周年記念号



里吉賢司

おじさんの青春日記 その10

十周年記念号

青春の感傷を胸に秘め、きょうもがんばる

世界じゅうの孤独なおじさんに捧げる。

著者

里吉賢司

表紙・イラスト

栗原俊幸

*表紙イラストの「壬生（みぶ）の花田植え」は広島県北広島町に江戸時代中期から伝わるもので、花で飾られた農耕牛や紺の着物の早乙女たちが、笛や太鼓に合わせ、て田植え歌を歌いながら苗を植える花やかな行事。国指定重要無形民俗文化財となっています。

「おじさんの青春日記」シリーズは冊子版「表紙カバーつき」のほか、ホームページでもご覧いただけます

<http://www.urban.ne.jp/home/ojisan/>

とよひら農業小学校

私の会社の食品製造事業部「味感工房」は昨年、創設十五周年を迎えました。

「味感工房」開設当時、会社は各種の機械器具を顧客の注文に応じて開発・製作する仕事や、特殊な自動車用品などの量産を主業としていました。それぞれ特許なども取得した自社開発の商品であり、小さな市場ながらその分野では国内トップシェアといわれる商品もありました。

反面、高額製品ながら一品料理的な性格をもつ機械など生産財の受注生産は経営計画が立てにくく、また、限られた商社との販売代理契約に依拠する消費財の生産業は、売上げが増加するほど特定商社の恣意に振り回され、メーカーとしての主体性を危うくする危険性をはらんでいました。

時あたかも日本経済のバブル絶頂期。好調な業績の裏で、私は得体の知れない将来の不安に駆られていました。当時、多くの企業が金融機関と手を組んで土地や株の投機に奔走し、OLや主婦までが多額の財テクに狂奔する世相でした。

歴史をひもとくまでもなく、この尋常でない経済現象が続くとはとても思えない、いつかはわからないけどやがてかならず破綻する、と私は日本を覆う虚飾の繁栄をどこか冷ややかに見ていました。自社の商品しかり。「盛んなものはやがて衰える」という盛者必滅の理（ことわり）は、父が遺したヒコキの商標を刻印した電気バリカン製造業の加速度的な衰退で、二十代に身をもって体験していました。

多種にわたる機械器具を顧客の注文に応じて器用に作るのではなく、専門領域を絞って自社技術を蓄積させながら特化したブランドとして確立すること。大衆になるべく近い商品、流通形態とし、特定の取引先や領域に偏らない事業を構築すること。対象とする販売地域は日本全国とし、小規模な市場でもその分野におけるオンリーワンをめざすことができないか。

最新の工業技術と大資本をもち、時代の変化と取引先の要請に応え続けることの出来る大企業ならばともかく、資本も人材もすべてに貧弱な我々のような小企業が長く生存し続けるには、地域の固有の文化や風土、歴史に根ざした自社商品やビジネスモデル、サービスを創造していく必要があるのではないか。

「最新・最先端の技術」を追う仕事は、わずかな油断で日々猛スピードで進化する技術革新によってすぐさま他に凌駕され、駆逐される。対して、たとえアナログ発想であっても、普遍的な価値をもつものは大衆に愛される限り安定して推移する可能性が高く、新規なアイデアや価値を付加することによって、まったく新たなビジネスに生まれ変わる夢もある。将来たえ会社の売り上げや規模は半減したとしても、身の丈に合った、時代の変化に耐えられるビジネスに変身していくことが大切なのではないか。しかも、その革新は足元の明るいうちに着手すべきではないか。

当時、迷ったあげくたどり着いたのが、このいくつかの仮説でした。

ただちに仮説の実証に着手しました。

後年、イタリアを旅行した際に遭遇した、ローマ、フィレンツェ、ミラノなど都市近郊に根づく現地の皮革、染織物、家具、自動車部品などの産業は実に刺激的なものでした。長い歴史や文化、斬新なデザインに裏打ちされた現地中小企業のもつ伝統的技術が、世界じゅうの顧客から熱い支持を受けていることを目の当たりにしました。

現地で或る工業製品を大量に仕入れようとした私が、相手企業の経営者に（大量に買うのだから）単価の値引きを持ち出したところ、返ってきた答えは耳を疑うようなものでした。「冗談じゃない。これだけ均一に品質がそろったものを百も二百もいっぺんに作るなんて至難なことなんだ。第一、天然の素材がそろわない。そんなに数が欲しいのなら割高になることを覚悟してほしい」と。

量産工業の発想にどっぷり浸かってしまっている私は、異文化の冷水を浴びせられた思いでした。



広島市に本社をもつオタフクソースさんからの相談が「食」の世界に入るきっかけになりました。両社で連合軍を組んで、「広島流お好み焼」を大手コンビニエンスストアへ売り込もう、まず首都圏に「広島流お好み焼」を普及させよう、というものでした。うちは専用ソースを、おたくは量産の難しい「広島流お好み焼」を大量に供給出来る生産技術の開発を、と。オタフクソースさんは社員全員の名刺に印刷された、「私はものごとをすべて善意に解釈し、明るく前向きに積極的に行動いたします」の標語が文字通り会社のすみずみまで行き渡った素晴らしいパートナーであり、食の世界に不案内な我々にとってはまたとない師匠でした。

江戸時代、薄く焼いた小麦粉に味噌をつけて食べる「麩の焼き」（別名「きぬた巻」）と呼ばれた庶民の食べ物は、その後「もんじゃ焼き」「とんどん焼き」「一銭洋食」などと姿かたち、呼び名を変えて現在に至りました。

広島が原爆によって壊滅したあと、戦後の復興に心血を注ぐ広島市民の食を支えたのが「広島流お好み焼」。独特の薄い小麦粉生地の上に乗った大量のキャベツや中華麺、豚肉、たまご、いか天。栄養バランスのとれた食品で、しかもボリュームたっぷりで安価。日本人が好む濃厚なソースをかけた味は大人から子供まで幅広い人気を集めていました。広島を訪れた観光客が、この鉄板焼き文化の傑作をクチコミで全国に伝えてくれました。その後のバブル経済崩壊による節約ムードが、庶民的なお好み焼ブームに拍車をかけたのかもしれない。

一年の研究ののち「お好み焼などの鉄板調理品 自動焼成機械」を始めとした一連の生産技術が完成し、今では北海道から九州まで普及した独特の機械によって、毎日十万食以上のお好み焼やホットケーキが生産されています。

食品を「焼く・加熱する」作業に特化した仕事を続けることで、新たな発見と未知が日々生まれています。

オタフクソースさんとのご縁はさらに深まり、自動焼成技術が完成した翌年には「広島流お好み焼」そのものを自社で製造し、冷蔵・真空パックに包装して駅や空港、デパートなどで販売する組織「味感工房」の開設につながっていきます。従来の事業がリスクの高い第二の創業を後押ししてくれました。

バブル経済の破綻とその後長く続く不況を追うように、新規事業と並行して営む従来商品は低迷の道をたどり始めました。長年愛顧いただいたお取引先の統廃合や廃業、倒産が相次ぎました。

名だたる金融機関が次々に破綻していくなかで、自死を選んだ経営者仲間もありました。近年になって、会社の新旧の事業シェアはついに逆転するにいたりました。電気バリカン製造業に始まった事業の度重なる変遷の節目に、私は否応なく立ち会うことになりました。

「味感工房」を核とする「食」事業は機械・電子系の事業とは異なり、天然由来の農作物や畜産、海産物を素材とするもの。当然のことながら収穫量や素材の品質は、年々の天候や自然災害に大きく左右されます。事業経営にあたってはこれまで触れることもなかった農業や畜産、さらには水産業界への見識が求められます。農業は「ものづくり」の基本中の基本。当時の私には、なんらかの形で「農業」が将来の日本産業のキーワードになるのではないかと、いつもおぼろげな予感もありました。

広島県山県郡豊平町の農業指導者、吉原徹さんが都会に住む小学生を対象とする「とよひら農業小学校」を創設、というニュースをこの頃偶然知り、さっそく親子で申し込みました。小学生の息子に自然や農業に触れさせたいということよりも、新たな食の事業に挑む私自身がまず土にふれることを必要としていたのです。

当時寄稿した新聞記事から。

*

「とよひら農業小学校卒業式」

【朝日新聞 一九九一年（平成三年）十一月二十四日掲載】

中国山地の過疎の町、広島県山県郡豊平町西宗に今年三月開校した「とよひら農業小学校」が十一月二十四日、第一回の卒業式を迎える。

学校（といっても校舎はない）が毎月一度開設される西宗地区は五十戸ほどの小さな集落である。酪農と農業を営む吉原さん（六一歳）の提唱で開校した同校には、遠く九州や関西からも含めて百十人の小学生が通う。小学二年生の私の息子も三月から生徒の一人になった。

「土や生物に触れる喜びと、食べ物が入るまでどれだけ人の手をわずらわしているかを都会の子供たちに知ってほしい」という吉原さんの呼びかけに、地区のお年寄り、町役場などが全面的に協力することになった。毎週第四日曜日が登校日。校則はなく、子供達は親や兄弟と一緒に早朝からマイカーでやってくる。

三月。畑の中での入学式。訓示を述べた校長先生は気象台長、大学講師を歴任した壇上哲郎先生。四月には遅い桜の時期がやってくる。町教委の案内で山すそを散策。ワラビ、ゼンマイなど、食べられる野草を採ってきてテンプラをこちそうになる。夏休み最初の登校日はジャガイモの収穫。月一回しかやってこない子供たちにかわって、畑の世話をしてくださるのもお年寄り。春の長雨で収穫したジャガイモは手のひらにおさまるほど小粒だった。天候がこんなにも作物の出来を左右することを身近に知ったのは初めての体験だった。

夏休みも残りわずかになった八月の小学校の目玉は和牛のバーベキュー。百キロはゆうに超えそうな肉塊が焚き火にあぶられてジュージュー音をたてる。スーパリーの容器に入った肉しか知らない子供にと

って、血にまみれた肉の塊は、生命あるものの体を奪って人間が生きていることの驚きを目のあたりに感じたことと思う。

学校に行くたびに「教室」の公民館周辺の雑草が整然と刈り取られていることに気づく。これにより親が幼児を見失う危険はなくなり、作物の並びを見ることが出来る。行き届いた配慮を地域のいたるところで感じ、関係者の苦勞と期待を思った。

「とよひら農業小学校」は現代が抱える都市と農村の問題に多くの示唆を与えているように感じる。あふれる自然のなかに沢山の人々が英知と情熱で創り上げた素晴らしいソフトウェアが、これからもより完成度を増し多くの地域に移転されることを願っている。

*

その後十年以上続いた「とよひら農業小学校」の創設者である吉原徹さんは、七五歳になられた現在も後輩の農業者や地域住民のリーダーとして指導にあたっておられます。

農業小学校第一期卒業生、当時小学二年生だった息子はいま、人間環境学部に通う大学生に成長しました。彼の最近のゼミ論文の題名は『有機栽培ぶどうを使用する（オーガニックワインの）から』。農業小学校へ通った当時のことを今も鮮明に憶えているそうです。

吉原さんは一九九一年（平成三年）自ら執筆された論文「農業問題は最大の都市問題」のなかで、このように語っておられます。



「農業問題は最大の都市問題」

吉原 徹（よしわら とおる）氏

一九二九年広島県豊平町生まれ。豊平町酪農業協同組合長をへて、広島県西部酪農業協同組合連合会会長。日本酪農共同組合株式会社監査役。豊平町西宗地区に都会の小学生を招いて地元の年寄りが農作業の指導をする「とよひら青空教室」活動を提唱、代表世話人をつとめている。西宗地区の伝統芸能でもある「神楽（かぐら）」の保存や、「とよひらそば」の普及にも尽力している。

農民である私から、すべての政治家に望むことは、当然、「農業について本気で考えてほしい」の一語につきる。

広島一区から衆議院選挙に立候補した公明党の某氏に、かつて農業問題で陳情した際、「公明党は都市型政党であり、農業問題はニュース性に乏しくマスコミにとりあげられることが少ないから……」というコメントがもどってきたことがある。社会党も都市型政党であり、農業問題にしてもか

つての農民運動の影をひきずった闘争の枠から抜け出せないでいる。

私は、農業問題は最大の都市住民の問題であると信じている。最近の余りにも目に余る農業つぶしで、新たに農業を継ぐ若者は全国で年間約四〇〇〇人に過ぎない。医者になる者が約七〇〇人もいるのである。

今、世界でもっとも重要な課題のひとつは人口問題である。西暦二〇二五年には、地球の全人口は一〇〇億を突破すると予測されている。現在は約六三億であるから、たとえば六三人で生活しているグループが、わずかのあいだに一〇〇人の生活をまかなわなければならなくなるのである。わずか三五年先のことである。その時、はたして安定した食料の輸入が可能なのだろうか。

百姓は昔から、五〇年、一〇〇年先のことに気がばりして今日にいたっている。じつくり腰を落ち着けて、子孫の代まで思いを至らせて農地を確保し、確実に到来するであろう食料危機にそなえるよう、多くの人に訴えている。川岸や土手に咲く彼岸花も、先人が飢饉にそなえて植えたものだと伝えられている。中国の天安門事件にしても、中国国内の食料問題が根底にあったと思うし、東欧諸国の政変やソ連国内の独立運動も、食料さえ豊富にあればあれほどの盛り上がりはなかったと思う。東西冷戦の終結も、基本的には食料問題が契機となっているように思えてならない。気象衛星の情報を分析し、地球上の作物の生育状況が政治やビジネスに利用されていることは承知のとおりであるが、はたして日本の農地、農村の荒廃ぶりを冷やかに見ているものがないといえるだろうか。農業問題は最大の都市問題であることがおわかりであろうか。

農林水産省は一九八九年末に「食料需給表」を発表したが、これによると全体の食料をカロリーベースでみた供給熱量自給率は四九パーセントとなっている。このままでは自給率は下がるばかりと思われる。(注二 四年は四パーセント)

今こそ農業に本気に取り組まなければ、どうにもならない時がくるのではないか。農業の安定こそが、国民生活安定の必須の条件だと思えますがいかがでしょうか。